蜷川幸雄（にながわゆきお）
埼玉県川口市出身。シェイクスピアはもとより、ギリシャ悲劇から日本の古典・現代劇まで幅広く手がけ、数々の名舞台を世界に送り出している。昨年も『近代能楽集』ニューヨーク公演、歌舞伎『NINAGAWA十二夜』、『王女メディア』、『天保十二年のシェイクスピア』など多数の演出を手がける。まさに世界を舞台に疾走し続ける演出家。2006年、第5回朝日舞台芸術賞特別大賞、第13回読売演劇大賞・大賞、最優秀演出家賞受賞。（財）埼玉県芸術文化振興財団芸術監督。

公開対談シリーズ 第3回

## NINAGAWA 千の目（まなざし）

# 蜷川幸雄 × 宮川彬良

（財）埼玉県芸術文化振興財団芸術監督・演出家　　作曲家・舞台音楽家

Yukio Ninagawa

**『NINAGAWA千の目（まなざし）』、第3回のゲストは宮川彬良さん。作曲家であり舞台音楽家である宮川さんは、蜷川の舞台『身毒丸』『草迷宮』の音楽を担当。**

Akira Miyagawa

**特に生みの苦しみがあったという『身毒丸』の話を中心に、音楽と演劇の不思議で素敵な関係を、宮川さんのピアノ演奏も交え、語っていただいた。**

## わかりにくいことが贅沢であると知った蜷川との仕事

蜷川（以下N）　『NINAGAWA千の目（まなざし）』シリーズ、第3回のゲストは宮川彬良さんです。お忙しい中おいで頂き、非常に友情の厚い行為と喜んでいます。

この劇場で音楽劇『身毒丸』、『草迷宮』の作品で一緒に仕事をしました。その才能は本当に見事で感動しました。それらも含めてこれからお話をしますが、宮川さんとお会いするのは何年かぶりです。

宮川（以下M）　お招き頂きありがとうございます。

N　宮川彬良さんです。宮川さんと一緒に仕事をした『身毒丸』で、初めての時は緊張しましたが、宮川さんは演出を見ながら稽古場でどんどん作っていきます。宮川さんは夢中になって稽古場の片隅で一生懸命にピアノを弾いて、「このまま帰ると途切れるから」とか言って近くのホテルに泊まっていました。

『身毒丸』で一番苦労したことは何ですか？

M　それまで僕は演劇における音楽の役割とは、わかりやすいというのが何より前提だと思い込んでいました。

それがあの寺山修司さんの本では、言葉が説明になった瞬間に死ぬ、面白くなくなるということがわかった。今までは説明をすればするほど面白くなるという方程式のはずだったのですが、自分の中でそれが崩壊して、全然これまで培ったいろいろな、それまでのお土産が使えなかったということです。

N　出だしのセリフが、「眼差しのおちゆく彼方ひらひらと、蝶になりゆく母の幻」これが一つのセリフというか短歌なのです。そういう芝居なので、当然言葉にメロディーを乗せることもすごく大変だったのです。

M　そうですね。わかりやすいということが、つまらないこととそこでわかってしまったのです。これってステキでしょう。僕は、結果的に「わかりにくいという贅沢がある」ということを知ったのです。

N　僕は寺山さんと同世代でいながら、なんとなく寺山さんの芝居が好きではなかったのです。寺山さんの文学的な才能は好きで、演劇が好きではなかったのです。だから、『身毒丸』の制作中は、鬱々としながらのセットの大まかなプランの打合せだけをして、フェスティバルに参加する下見のためにイスラエルに行きました。パレスチナにも行って、その現状を見る中で感じたのは、「寺山修司（のセットプランにして）はどうもちゃっちいな」と思って、ガザから東京へ「全てのプラン変更」とファックスを送りました。

そして、日本に帰ってきてアドリブで演出しました。自分のその時の混乱そのものが演出に現れていたり、宮川さんが作る曲に刺激されたり、そして藤圭子さんが歌ってくれたりして……。

M　あれはありがたかったですね。あの時の蜷川さんのパワーというか、やはり感じました。「これは藤圭子に歌ってもらおう」といわれた時には、この人は何を言い出すのだろう、藤さんは引退しているのだし、OKをしてくれる訳がないじゃないかと思いましたが、「面白そうだから、やりたい」とおっしゃってくれたそうです。

N　思い続けるとちゃんと通じるんですね。言うだけは言ってみるもんですね。

M　あれは恐れ入りました。

N　日本の古い物語、説教節のバリエーションとしての寺山さんがお書きになった本を宮川さんがやる。宮川さんはミュージカルなどもお書きになっているが、そういう格闘技みたいなのを繋いでくれるのは、藤さんのしゃがれた声、前近代を引きずっているような歌声だと思ったのです。そうすると寺山修司さんと宮川さんの曲に僕が考えるノイズが入れられるという思いがありました。声がしゃがれているというのが結構僕には大事だったのです。

何か弾けないですか。

## 演劇とは対比だ。蜷川の言葉に、“ナスの理論”を発見

M　じゃあ、最初に本を見た時に、この曲だけは書いておいたのを……。　～ピアノ演奏～

宮川彬良（みやがわあきら）
1961年東京生まれ。81年東京芸術大学作曲科入学。劇団四季、東京ディズニーランド等のショー音楽を手がける。数々のミュージカルなどを作曲し高い評価を得ている自称・舞台音楽家。代表作に『身毒丸』（蜷川幸雄演出）『ハムレット』『ルビチ』など。一方、大阪フィル・ポップスコンサート、宝塚アンサンブル・ベガなど、全国で演奏会を行っているほか、鮫島有美子、平原綾香など多くのアーティストとレコーディングセッションを行っている。96年『身毒丸』で読売演劇賞スタッフ賞受賞。同年「大阪フィル・ポップス」でABC国際音楽賞受賞。『マツケンサンバII』の作曲や、NHK教育テレビで放映中の『クインテット』（月曜から金曜の午後5時半から）で、お茶の間でもお馴染みに。

photo:幸田 森　構成:鴨澤章子

N　人々がゆっくり歩いているのです。オープニングに使われます。

このような曲を聴きながらオープニングを考えるのです。そうするとここはゆっくり歩けばいいのだなあ。ではこの美しい曲に何をしようか。ああ、そうだグラインダーで火花を落とそう。そうするとこの美しさにちょっと違うイメージが。美しいが鉄をギーと削っている4台の火花が橋の上からビーと落ちてくる。そうするとメロディの美しさに負けないかな。緩やかな速度で人が歩けばいい。よし小さい人を探そう。ではゲタを履こう。というように、イメージが音に触発されて逆の方に向けようとしたりして、いろいろなことが出てくるのです。

M　蜷川さんの中ではこれはとてもきれいだったんですね。僕はこれでもわりと音を濁している感じというか、ショパンのようなきれいさではない感じだと思って作っていましたが、カセットテープをお聴かせした時に、「宮川くん、きみ才能があるんだ」と言われました。（笑い）

N　僕、そんなこと言ったの?

M　なんか、それでフリーパスを頂いたような気持ちがしました。これで後は好きに作っていいというお許しを頂いたような。調子に乗って、わかりやすさを目指してきれいな曲を作り続けたら、2曲目からいい顔をなさらなかった。

それで「こんなきれいな曲ばっかりだと僕は天井から腐ったナスでも降らさなければならないよ」と言われました。そこで「そうか演劇は対比なのだ」と少しわかったのです。「ああそうか、これはきれいで、ビジュアルだと、めちゃくちゃ汚くしたくなってくるのだ。だから藤圭子さんのしゃがれた声というものを欲しているのだ」とわかりました。そこで、「ではこういう曲はどうですか」と私が言った時の蜷川さんはとても嬉しそうでした。そのナスの理論は僕にとっては未だに忘れないです。

# 僕は『身毒丸』以降、演出が変わった

『身毒丸』の映像も流され、家が組み立てられるシーンなどを、音楽とともに鑑賞。

N　自分の性格からそれはすごくわかります。きっとそう言うと思います。

M　ただそれだけだったら『身毒丸』の音楽は多少小ぶりに成功していたと思います。それが稽古初日に限って、巨匠がもう一人いらっしゃいました。それは誰かというと主演の武田真治の事務所、ホリプロの堀威夫さんです。僕がナス理論で頭がいっぱいの時に、帰り際の出口の所で「宮川さん、一つ（ミュージカル『Cats』の）『メモリー』のような曲を作ってね」と、全く別な世界から言うのです。“ナスでメモリーで藤圭子かよ”みたいな、もう逃げ場があの時はなくなりました。寺山さんが大きく立ちはだかっていて、これまでの所にも帰れないし、そこで、その二つのヒント「メモリーで、すごく汚い」ということのミックスしたのが僕の中ではある種のノスタルジーだったのです。

自分にとってのノスタルジー、ノスタルジックというのは悪いことだと思っていたが、それって、みんなに共通することで、メモリーで、しゃがれてて、腐ったナスにも対抗するようなおいしいエリアだったのです。つまり子守歌を作ろうと思い、後の十数曲を作っていったのです。

～ピアノ演奏～

これ哀しいでしょう。

N　「お母さん!」というセリフが入ってくるんだよ。「お母さんもう一度僕を生んでください」とか。

M　この曲、今でも大好きです。なんか泣けるでしょう。（拍手）

自分の中でそれが芸術でもあり、俗っぽくもあり、つまりきれいでいて汚くて、わかりやすくてわかりにくいというように全部が入っているノスタルジックという封印していたエリアがそこにあったのです。

## 『身毒丸』が、その後の蜷川にビジュアルを復権させた

N　僕は『身毒丸』以降、演出が変わったのです。なにをやってもいいのだ。そしてビジュアルにもっと凝ろうと思いました。一時それを放棄して、骨だらけの演出をしていた方が批評家に評判がいいのです。あれをやってから「僕はいいんだ。ちゃんとビジュアルを復権しよう」と思い、あれから変わって、それまではちっと途絶えていた仕事が来るようになりました。

M　『身毒丸』でも、家が出来ていくなんて。貴重な1時間半の中のそれに5分半ぐらい割いているんですものね。

# ノスタルジックという封印していたエリアがそこにあった

N　家というのはお父さんがいて、お母さんがいて子供がいるから家であって、そのために亡くなったお母さんの代わりに、新しいお母さんを買ってくるわけです。そして家の形を作るわけです。お母さんを買って大通りを歩いて、ターンする。本では往来から次のシーンは座敷になるのです。道を歩いていて、そこから玄関が出てきて、中の廊下とか、仏壇の間とか、居間になって、ご飯を食べる台所になってと、セットがどんどん出てきて、一軒の家が（舞台上に）できてくる。お母さんを買ったことによって精神的スタイルとしての家もできるが、物質的な構造的な家も出来上がっていくという演出になっています。これが結構冴えているのです。

M　そういうのを自画自賛というのですよ。（笑い）　これが出来た日を克明に覚えていますよ。とにかく最初のシーンが未完成だったかもしれないが、ここは何か音楽が入るでしょうと言われたのです。僕が用意してきた「トントン、タンタン」という歌舞伎の付け打ちみたいなリズムと蜷川さんの考えていた家の組み立てが「はい。用意。歩くよ」「エイ、歩く」「ドンドン、タンタン」となったら、そのまま5分間止まらないで今のシーンが出来たのです。あれはすごいセッションでした。

N　打合せナシでやっていました。「何々の間が出てくる」、「四畳半」「六畳」「板の間」とみんな大騒ぎして……。

M　あれが蜷川組というのですね。みんなが右往左往していて。

N　本当にあれは至福の時間で、良い作品でした。

宮川さん、話は違いますがNHKでお人形さんを使ったりしてやっている番組をたまにみますが、あれはどういう内的必然性ですか。

M　あれは声を掛けていただきました。『クインテット』という番組なんですが、音楽家の僕が見て楽しい番組を作ってくれとプロデューサーがおっしゃったのです。「音楽の向こうに何か大事なことが隠されている、この番組はそれを写すのだ」ということをテレビ局の方から言ってきたのです。これは嬉しかったです。

N　これは面白いです。ちょっと感動的で、僕は大好きです。実はライブでそういうことをやるような日がきたらここでやってくれないかなと思っています。あれこそ最高のエンターテイメントであり、子供たちがあれをみたらよい体験だと思います。大人が見ても面白いです。

M　あれを教育という所に逆に僕は一石投じているつもりなのです。エンターテイメントにも一石投じたいし、教育もです。子どもに媚びるのではなくて、こちらが熱中することが教育ではないかということです。

N　これは宮川さんにすごく合っていると思います。宮川さんは子どもと大人が混ざっているようなそんな所があります。

M　それに蜷川さんが合うのね。蜷川さんもとても坊やでもありで。

2006.6.3　彩の国さいたま芸術劇場 映像ホールにて